Cranford の笑劇とペーソスの間

関　口　章　子

Cranford は確かにユーモラスなエピソードを堪能させてくれる作品である。しばしば引き合いに出される「石灰水のかめに落ちた牛」や「猫の飲み込んだレース」の話のみならず、ミス・マティの蝋燭に懸ける倹約ぶり[1]、またカードを知らないはずのミス・バーカーが遠慮もなくゲームに勝ち続ける様子[2]など、挙げればきりがない。そもそもクランフォードが御婦人だけの町であるという設定自体が、もちろん笑劇である。

しかしまた *Cranford* は、ペーソスという言葉でも語られる。ブラウン大尉とミス・ブラウンの死、ミス・デボラ・ジェンキンズの死、そしてピーターの失踪事件など、人の生に起こりうる避けられない悲しみが滲み出している。

ギャスケル夫人は、自らの少女期の故郷ナッツフォードを舞台としたこのユートピアたる場所で、なぜユーモアのみに徹しなかったのだろうか。クランフォードという町の中で、笑劇とペーソスが互いに与える効果について考えてみたい。

Cranford は、チャールズ・ディケンズの依頼で、彼が編集をしていた週刊文芸誌「ハウスホールド・ワーズ」の1851年12月号に読み切りの物語として掲載された。しかし、ディケンズ自身もその面白さの虜となってしまい、続編を要請するところとなり、その後1853年5月まで9回にわたって連載されることとなる。同年、一連の物語という体裁に修正されて単行本として出版されたが、読み切りの物語として設定された冒頭の二章分の書き急いだ感覚が違和感を与え、それがしばしば、「クランフォードには実際のところ、骨組みがない[3]」とか「クランフォードには筋書きも結末も、恋愛もない[4]」と評される所以となっているが、批評としてもまたギャスケル夫人にとっても、それは無理からぬことであろう。——尤もそれらの批評も、*Cranford* の慈愛に充ちた世界を誉め称える上で

の、単なる枕詞に過ぎないのであるが。——

とはいえ作者にとっても物語の一貫性は課題であったと見え、第6章までは一定のパターン付けを試みることが出来る。いずれも、死者あるいは失踪者が生じ、そのために何らかの変化が起こるという構図である。

死者あるいは失踪者

A. Chap.2　Captain Brown（轢死）
　　Miss Brown（病死）
　　Miss Deborah Jenkyns（衰弱しつつある状態）
B. Chap.4　Mr.Thomas Holbrook（病死）
C. Chap.5　手紙を通して、死んでしまった人々の影が浮かび上がる
　　（Miss Jenkyns 姉妹の祖父母、両親）
　Chap.6　思い出話の中で弟 Peter の失踪、姉妹の両親の死がある

生ずる変化

A. Miss Jessie Brown と Major Gordon の結婚
B. Martha に恋愛の許可を与えるという Miss Matty の意識の変化
C. 牧師館からの引っ越し

完結させるつもりであった第一・二章での構図を、二回目連載分の第三・四章、そして三回目連載分の第五・六章に踏襲させて、それぞれを独立したエピソードに仕立てようとしたことを伺うことが出来る。

またさらに、ペーソスを成す悲劇には必ず、そこから抜け出せるささやかなユーモアが用意されている。それらは何れも些細でありながら、作中人物たちが悲嘆にくれていればいるほど、まじめであればあるほど提示された滑稽味との落差を生み、読者を笑いに誘う上等な笑劇となる。

笑　劇

A. ブラウン大尉の葬儀に備えて、デボラが帽子に黒い布の飾りをつける。仕事が終り彼女がかぶってみせた時、「私」は悲しみに沈んでいるはずなのに、

なぜかヘルメットを思い起してしまう。翌日、デボラは再びそのヘルメットを「装備して」朝食のテーブルに現れる。[5)]

B. 昔の恋人であったらしいホルブルックのもとを訪れたマティは、自分の独身を悔いてか、マーサに禁じていた恋愛を許し、互いに思い合う相手が出来たら週に一度会っても良いと告げる。マーサは待ってましたとばかりにジェム・ハーンの名前を出す。[6)]

C. 母親の死を回想しながら、マティは、デボラがたとえ百人から申し込まれても父を残して結婚はしないと誓ったことを思い出して言う。「そんなにたくさん申し込みがあるとは思わなかったし、実際は一つもあったと聞かなかったけれど、それよりもそう口にするだけの信念が大事なの。」[7)]

これらの笑劇を成り立たせているのは、取りも直さず、ギャスケル夫人の目を持った語り手メアリー・スミスである。彼女はクランフォードと密接に関わりながらも、常に部外者としての視点を持ち、客観的な語り口に徹している。その冷静さが他の作中人物たちの言動のズレを際立たせ、滑稽味あるものとしているのである。

第七章以降では人の死が描かれることはなく、むしろ亡くなった人々の後を補うかのように、グレンマイア男爵夫人の来訪や奇術師ブルノーニの巡業、またジェイミソンの奥方のチェルトナムへの静養といった、クランフォードへの出入りが描かれる。そして、第三章以降の中心人物であるミス・マティの破産を軸に据えながら、第十五章での、弟ピーターのインドからの、恐らく30年ぶりの帰還という最終的な大事件へと集結されていく展開になっている。ブルノーニの巡業がなければピーター帰還の切っ掛けもなかったし、またマティの破産がなければ、彼が大金持ちになって帰る意味がない。マティの破産は、彼女の人間性や周囲の人々の善良さというクランフォードの価値を提示するとともに、ピーター帰還への劇的な演出ともなっているのである。さらに最終章では、第一・二章の登場人物であるミス・ジェシー・ブラウンとゴードン少佐も帰国し、ジェイミソンの奥

方も戻り、その上ブルノーニまでも招かれて、作中人物全員が勢揃いしての幕、という運びとなる。このように、ギャスケル夫人は *Cranford* に、一編ものとしての何らかの関連性を持たせようと努めたのではないかと思われる。

またそのために、「小道具」が使われることもあるようだ。ホルブルックの死を知った時にマティが新調した「未亡人用のではない」帽子は、後に第七章でも登場する。

> 'Oh! I only meant something in that style; not widows', of course, but rather like Mrs. Jamieson's.' [8)]
>
> ⇩
>
> Miss Matty had not yet changed the cap with yellow ribbons, that had been Miss Jenkyn's best, and which Miss Matty was now wearing out, in private, putting on the one made in imitation of Mrs.Jamieson's at all times when she expected to be seen. [9)]

また、有名なミス・ベティの牝牛についても、第七章で再び触れられている。

> — an old lady had an Alderney cow, which she looked upon as a daughter. ... The whole town knew and kindly regarded Miss Betty Baker's Alderney; ... [10)]
>
> ⇩
>
> She also (as I think I have before said) set up her cow; a mark of respectability in Cranford, almost as decided as setting up a gig is among some people. [11)]

恐らく、第七章以降のそれまでと異なる構図を補うため、何らかの関連付けを要したのであろう。

さらに一編ものとしての完成度を高めているのは、舞台の一貫性である。かろうじてメアリ・スミスが実家で手紙を読むときだけ、位置がドランブルへと移行

するが、いずれもミス・マティやミス・ポールまたはマーサからの手紙なので、視点がクランフォードから逸れることは決してない。メアリ・スミスは記述されているだけでも11回ほどクランフォードとドランブルを行き来するのだが、ドランブルについての描写も無く、移動中の状況についても語られず、また時間の経過も感じさせないので、クランフォードの孤立性、偏狭性が高められ、その結果読者はクランフォードにのめり込まされる。

> About a year after Miss Matty set up shop, I received one of Martha's hieroglyphics, begging me to come to Cranford very soon. I was afraid that Miss Matty was ill, and went off that very afternoon, and took Martha by surprise when she saw me on opening the door. [12)]

ここでは、メアリが手紙を受け取ってドランブルを出発し、そしてマティの家に着くまでが、わずか1パラグラフの中に盛り込まれている。ドランブル側であるメアリの父親の、マティの善良さに対する「そんなお人好しはクランフォードでなら良いのかも知れないが、世間じゃ通用しない」[13)] という台詞ともあわせてみると、よりクランフォードの俗世間と離れた隔離性が高められる。

そしてそれを高めるのに一役買っているのが、語り手メアリ・スミスの「話術」である。彼女についての、彼女自身の描写を拾ってみよう。

> In my own home, whenever people had nothing else to do, they blamed me for want of discretion. Indiscretion was my bugbear fault... I was tired of being called indiscreet and incautious; and I determined for once to prove myself a model of prudence and wisdom.[14)]

> But I was right. I think that must be an hereditary quality, for my father says he is scarcely ever wrong. [15)]

> ... I tried in vain to think of so me subject which should effectually

turn the conversation; but I was very stupid;... [16]

彼女の自己評価については、自信を持ったり卑下したり、はっきりしないのであるが、その分若い娘らしい生き生きとした人物像が浮かび上がって来る。だがやはり、「おっちょこちょい」なのであろう。しばしば、「少々先をお話ししすぎてしまいました」[17] とか「大分、話が逸れてしまいました」[18]、あるいは「もっと以前にお話ししておくべきだったのですが」[19] といった注釈が入るのである。こういった部分から読者は、メアリ・スミスがかなり思いつきで話をしている、しかもどこか別の場所で自分に対してのみ語ってくれているという印象を受けることになる。さらに時々、'Have you any red silk umbrellas in London?' [20], 'Do you ever see cows dressed in grey flannel in London?' [21] といった問いかけをしてくれるので、読者の側は大都会ロンドンに住んでいてクランフォードを全く知らず、大商業都市ドランブルの住人メアリ・スミスと組んで、クランフォードを覗き見ているような面白さが生じる。その中にはクランフォードよりも時代を先んじているという優越感と、そして当然、忘れ去られてしまった「人の心」に対する羨望が入り混じっている。同時にそれは大都市にはないクランフォード独特の時間軸を示し、より一層の郷愁を誘う。とりわけメアリ・スミスが名を明かす第十四章までは、その匿名の語り手をごく親しい友人と想定する自由も与えられており、その匿名性が直接自分とクランフォードを結ぶ働きをしてくれるので、読者は自分だけのクランフォードを持つことが出来る。

この時、その匿名の親友の人々と人生に対する深い洞察が、*Cranford* 全体の雰囲気を決定する上での重要な鍵となっている。

> I HAVE often noticed that almost every one has his own individual small economies – careful habits of saving fractions of pennies in some one peculiar direction – any disturbance of which annoys him more than spending shillings or pounds on some real extravagance. [22]

これは人の「倹約」についての考察で、この後ミス・マティについては「蝋燭」、自らについては「紐」に弱いと吐露している。また次に挙げる、人の感情につい

ての洞察も、たいしたものである。

> 'She has married for an establishment, that's it. I suppose she takes the surgery with it,' said Miss Pole, with a little dry laugh at her own joke. But, like many people who think they have made a severe and sarcastic speech, which yet is clever of its kind, she began to relax in her grimness from the moment when she made this allusion to the surgery; ... [23]

> I don't know if it is a fancy of mine, or a real fact, but I have noticed that, just after the announcement of an engagement in any set, the unmarried ladies in that set flutter out in an unusual gaiety and newness of dress, as much as to say, in a tacit and unconscious manner, 'We also are spinsters.' [24]

「何か自分で気の利いたことを言ったと思う人は、機嫌が良くなる」、そして「仲間内の誰かが結婚したとなると、皆独身であることを示すかのようにはしゃぎだす」という、誰もが感じていながらも言葉ではっきりとは表現しがたい人の本質を、実に鋭く的確に捉えている。他にも「洒落たものというのは、可愛らしくもなければ気持ちも良くないので馴染めない」[25]、あるいは作中人物の台詞を通して「慎みの無いことでなければいいのに、楽しいことってだいたいそうなのね」[26]、「訳と言うのはいつでも誰か他人の言い分を通すこと」[27] 等、いずれもその的を得た表現の巧みさに、納得するより他、無いのである。

このメアリ・スミスになり替ったギャスケル夫人の、時に冷ややかとも思えるほど冷静な観察は、ユーモアの原動力となる徹底した客観的視点を可能にしている。デボラが頑張って折角こしらえた葬儀用の帽子も、メアリに言わせれば「ヘルメット」である[28] し、独身の老嬢たちがはしゃぐのを見ては「暖かくて心地よい、春の陽気のせい」[29] とうそぶいてみせる。彼女の若い娘らしい無邪気さ、あるいは無頓着さは、ミス・マティの破産が予期される場面にも表れている。

I could not see that the little event in the shop below had in the least damped Miss Matty's curiosity as to the make of sleeves, or the sit of skirts. She once or twice exchanged congratulations with me on our private and leisurely view of the bonnets and shawls; but I was, all the time, not so sure that our examination was so utterly private, for I caught glimpses of a figure dodging behind the cloaks and mantles; and, by a dextrous move, I came face to face with Miss Pole, also in morning costume (the principal feature of which was her being without teeth, and wearing a veil to conceal the deficiency), come on the same errand as ourselves. But she quickly took her departure, because, as she said, she had a bad headache and did not feel herself up to conversation. [30]

悲劇的な出来事の合間や直後に、常にこのような特に諷刺を意図してはいない笑劇が挿入されると、返って滑稽味を増す効果のあることは先にも述べた。しかし、クランフォードの淑女達と接するうち、一見悲哀とのバランスを取るための笑劇のようにみえて、実のところは誰もが優先しなければならない差し当たっての「人の生活」というものについての、ユーモアとない交ぜになったペーソスを感じさせることに気付く。彼女達が本気であればあるほど、観察者、即ち読者はおいそれと笑う訳にはいかなくなり、その発散され尽くせない笑いの連続が、やがて *Cranford* 全体をペーソスに満ちた摩訶不思議な笑劇に仕立て上げていくのである。

Cranford は確かに、善良な女性たちが互いに支え合って、様々に取り繕いながらも慎ましく上品に暮らす町である。しかも男性不在の「アマゾン」の町である。だが、各人の事情を当ってみると、ミス・ポールにはヘイター牧師を追いかけ回したらしいという過去があり[31]、ミス・マティにはミスター・ホルブルックとの結婚を断念したという昔話がある。両者が結婚について語り合う場面では、「結婚しないで済んだことに感謝すべき」と見栄を張るミス・ポールに対し、ミス・マティは「夫がいれば、泥棒や強盗や幽霊から護ってくれる」と主張する。そして、しみじみと呟くのである。

...; but I may say that there was a time when I did not think I should have been only Miss Matty Jenkyns all my life; for even if I did meet with any one who wished to marry me now, ... [32]

マーサの赤ん坊もかわいがる子供好きのミス・マティは、とりわけ結婚願望が強かったようだ。しかしその強さを決して表には出さず、慎ましく生きてきたのである。確かにその姿には、「十九世紀の組織的な女性の幼稚さの犠牲」[33] を見ることが出来る。

また彼女には、メアリにも長いこと伏せられていた、ピーターの失踪という過去から引き摺る苦悩がある。しかも、息子を亡くしたギャスケル夫人が描くピーターの失踪シーンには真に迫り過ぎるものがあり、それがハッピー・エンドを迎えるための演出であったとしても、マティの薄幸のイメージは拭えない。

実際のところ消えてしまう男たちこそが自由なのであって、孤高の存在であるかのようなアマゾン達には、家族や近所付き合いや、見栄や誇りに縛られて青春を全うできなかったという悔いが残っているように感じられる。「男女平等なんてとんでもない！女のほうが上です。」[34] という啖呵の中には、逆に必ずしもそうではない現実が見え隠れするのである。彼女達の意識の一歩踏み込んだところには一貫してペーソスが漂っており、部外者としてクランフォードを訪れた場合に感じるユーモアやファースのユートピアとは二重構造をなしている。

しかしそれこそが現実なのであって、我々が日々実感する自分と他者との繋がりであり、軋轢なのである。

「理想郷クランフォード」は、今も日常生活のそこかしこに存在する場所だけに、人の心に親しみと共感を呼び起こし、また懐かしさを誘う。その笑劇とペーソスの間には作中人物達の喜怒哀楽が溢れ、読む者の感情と混ざり合い、エピソードからエピソードへと紡がれる一つの大きな世界を作り上げている。

注

1) Elizabeth Gaskell, *Cranford*, (Oxford: Oxford University Press, 1972), pp.41-42.

2) *Ibid.*,pp.66-67.

3) A.B.Hopkins, *ELIZABETH GASKELL: Her Life andWork*, (London: John Lehmann, 1952), p.108.
4) A. Stanton Whitfield, *MRS GASKELL HER LIFE AND WORK* (London: George Routledge & Sons Ltd., 1929), p.135.
5) *Cranford*, op.cit., p.18.
6) *Ibid.*, p.40.
7) *Ibid.*, p.58.
8) *Ibid.*, p.39.
9) *Ibid.*, p.60.
10) *Ibid.*, p.5.
11) *Ibid.*, p.61.
12) *Ibid.*, p.146. 尚、下線部は筆者による。
13) *Ibid.*, p.145.
14) *Ibid.*, p.111.
15) *Ibid.*, p.147.
16) *Ibid.*, p.155.
17) *Ibid.*, p.74.
18) *Ibid.*, p.119.
19) *Ibid.*, p.144.
20) *Ibid.*, p.2.
21) *Ibid.*, p.5.
22) *Ibid.*, p.40.
23) *Ibid.*, p.115.
24) *Ibid.*, p.116.
25) *Ibid.*, p.33.
26) *Ibid.*, p.34.
27) *Ibid.*, p.129.
28) *Ibid.*, p.18.
29) *Ibid.*, p.116.
30) *Ibid.*, pp.124-5.
31) *Ibid.*, p.88.
32) *Ibid.*, p.106.
33) Patsy Stoneman, *ELIZABETH GASKELL*, (Brighton: The Harvest Press, 1987), p.93.
34) *Cranford*, op.cit., p.12.